

書 評

Regina B. Oost, *Gilbert and Sullivan:
Class and the Savoy Tradition, 1875-1896*
(Farnham: Ashgate, 2009)

金 山 亮 太

かつてはサヴォイ・オペラ関連の出版物と言え、いずれも個性的な人物であった W. S. ギルバートと A. サリヴァンの人間関係と各演目の内容紹介に紙幅を費やした一般書か、演劇関係者向けの語彙集や必携書の類か、あるいは愛好者のためのトリビア的なものと相場が決まっていた。英米の大手出版社から注釈つきの完全版が定期的に刊行されていることから見ても、テキストの需要は常にあるのだろう。多文化主義的な風潮が強くなった今日ではあまり見られなくなったようだが、つい最近までイギリスの小中学校の音楽の授業でサヴォイ・オペラの曲を歌ったり、あるいは学芸会の出し物で演じたりすることは、ごく日常的に行われていたようである。ヴィクトリア朝後期に誕生したこの喜歌劇は、英語圏の人々の間に幅広く浸透し、サブカルチャーの一つとして定着しているのである。

これほど親しまれているにもかかわらず、いや、むしろあまりにも彼らの日常の一部となっているせいか、サヴォイ・オペラをヴィクトリア朝文化研究の文脈で考察する試みは本国イギリスでさえほとんど行われてこなかった。ギルバートの書簡集やサリヴァンの伝記の類が出版されることはあっても、作品を文学テキストとして正面から論じるようなものは少なかった。ましてや、サヴォイ・オペラの持つ文化的意義を時代背景とからめて扱う著作は皆無と言ってもよいほどであった。ようやくこの喜歌劇が真面目な研究対象となり始めたのは、20世紀も終わりに近づいた1980年代以降のことである。

たとえば Charles Hayter, *Gilbert & Sullivan* (Macmillan, 1987) は、この種のものとしては初めてヴィクトリア朝後期の演劇状況の中でのサヴォイ・オペ

ラ独自の位置づけを、他のヴィクトリア朝演劇とは切り離して考えようとしたものであったが、残念ながらやはり各作品上演時の様子などを紹介することに忙しく、一般的入門書の代表である Lesley Baily, *Gilbert & Sullivan and Their World* (Thames and Hudson, 1973) の出来栄えをしのぐには至っていない。わずかに Alan Fischler, *Modified Rapture: Comedy in W. S. Gilbert's Savoy Operas* (University Press of Virginia, 1991) が、ギルバートの喜劇は当時の新興中流階級の人々のリスペクタビリティの観念に抵触することなく、むしろ彼らの微妙な選良意識をくすぐることに成功していたと述べ、従来 của サヴォイ・オペラ関連の書物とは一線を画するものとなっていた程度であった。

ところで、1990年前後にはヴィクトリア朝演劇に関する研究書が続げざまに刊行されている。それまでイギリス演劇の研究と言えばエリザベス朝演劇や現代劇を扱ったものが圧倒的に多く、ヴィクトリア朝演劇については英文学史の教科書でさえ軽く触れる程度だったのであるから、この変化は注目に値する。この時期に出されたヴィクトリア朝演劇研究書の代表的なものとしては、Russell Jackson, *Victorian Theatre* (A & C Black, 1989) や George Taylor, *Players and Performances in the Victorian Theatre* (Manchester University Press, 1989)、Michael R. Booth, *Theatre in the Victorian Age* (Cambridge University Press, 1991) が挙げられる。題名を見れば一目瞭然である通り、この3つの研究書の主眼はヴィクトリア朝演劇の脚本の分析や解釈ではなく、産業革命の恩恵を受けて変貌を遂げたヴィクトリア朝の劇場形態が、演出方法や劇作家と役者の立場や観客層の変化に影響を及ぼした様子を跡付けることであった。ヴィクトリア朝演劇関係の研究書ならば、劇場を議論の核に据えると説得力を持つであろうという予断をこの時期の研究者なり出版社なりが持っており、結果的によく似たタイトルを持つ本の出版が重なってしまったのである。この奇妙な符合が示唆するのは、時代の趨勢が出版されるべき書物の主題を逆に指定するという(半ば自明な)事実である。そして、本書もまたこの影響の下にあるように思われる。まずその内容を紹介する。

「階級とサヴォイの伝統」という副題が示すとおり、より好ましい観客層(すなわち中流階級以上の富裕層)がサヴォイ劇場の多数派となることによって、この喜歌劇を鑑賞することが階級的ステイタス・シンボルになっていく過程が議論の中心である。本書の前半部では、ウェスト・エンドにあるライ

バル劇場との差別化をいかに興行主ドイリー・カートが図り、サヴォイ劇場から労働者階級の観客を排除する一方、中流階級の観客を集めようとしたか（第1章）、その試みにギルバートとサリヴァンがどのように加担したか（第2章）、挿絵入りプログラムや上演中の戯曲の楽譜などの商品を劇場内で売ること、観客に「サヴォイヤード（サヴォイ・オペラの関係者やファン）」の証拠品を自宅で飾らせ、この種の商品に対する収集欲を刺激することでいかにリピーターを増やそうとしたか（第3章）などが、一次資料を用いて丁寧に論じられる。しかし、これらのことは既に従来の入門書が概括的にはあっても早くから指摘していることであり、新鮮味に欠ける憾みが残る。

本書の真価はむしろ、後半部分において扱われる、安定した観客層がもたらしたものについて論じるところにある。固定ファンが誕生すると、サヴォイ・オペラの脚本が実はワンパターンで、どれもよく似た展開であることが重要になってくる。長寿を誇るテレビドラマは、同じような登場人物によって同じような物語展開が繰り返される（まさしく『水戸黄門』的なものである）からこそ安心して見ていられるのだが、これと同様に、サヴォイ・オペラの観客はこの喜歌劇の各種の「お約束」に対する理解を前提にしている点で、劇団側と一種の擬似家族関係を結ぶことになり、そこには、すべてを承知の上でワンパターンのお芝居を鑑賞するという共犯性が見られる（第4章）。結果的にこの喜歌劇を観る中流階級の人々の世界観がそこでは尊重される一方、彼らのみが理解できる符丁や隠語などによって、ますます部外者が参入しにくくなっていく（歌舞伎座で絶妙なタイミングで「音羽屋！」「成田屋！」と掛け声をかける人々が、一見の客に味わわせる疎外感を想像された）。サヴォイ劇場内の空気の一部感を乱す要素は排除され、観客層はますます固定化していく（第5章）。そして、このようにして醸成された雰囲気がある種の伝統となり、さらに次の世代へと引き継がれていく中で生まれたのが、サヴォイ・オペラを受容できる者とできない者との間の教養（カルチュラルギャップ）（文化）格差であった。サヴォイ劇場に集う人々は、階級意識へのこだわりを当てこするギルバートの台詞に大笑いしながら、その実、誰よりも階級意識に囚われていた（新井潤美氏の言を拝借するならば「階級にとりつかれていた」）のであり、彼らは自らの戯画を啜うという複雑かついささか自虐的な楽しみ方をしていたのである。ギルバートもサリヴァンも観客と同様の社会階層に属している

がゆえに、彼らの望んでいるものを理解し、彼らの嗜好や価値観、不安や期待を共有していた。サヴォイ・オペラは階級的アイデンティティと安心感を観客にもたらず場所となり、中流階級にとって文化的遺産を味わわせてくれるものになった、と著者は結ぶ。(第6章)。

本書の考察対象はヴィクトリア朝後期のイギリス演劇界であり、今日なお続く英語圏の国々でのサヴォイ・オペラ人気については一言も触れていない。しかし、アメリカ南部ジョージア州のウェズレイン女子大学（アメリカ最古の女子高等教育機関である）に勤務する著者がこのような書物を上梓する背景にこそ評者は興味を引かれる。ヴィクトリア朝演劇に注目が集まり始めた1990年代には、イギリスにとって重要な出来事がいくつか生じた。たとえばカナダではケベック党がケベック州で第1党となり（1994年）、コモンウェルスからの独立の是非を問う住民投票がその翌年に行われた（結果は僅差で否決）。1997年に発足した労働党政府の下で、スコットランドとウェールズの自治政府に大幅な権限委譲が行われた。同年に香港が中国に返還され、アジアにおける大英帝国の記憶の拠り所を失った。ベルリンの壁の崩壊（1989年）、ソ連邦の解体（1991年）、欧州連合の正式発足（1993年）といった激動の時期の直後であったことも相まってか、コモンウェルスの連帯には陰りが生じ、連合王国の緩やかな解体を予感させる雰囲気がいギリス国内を支配しつつあった。アングロ・サクソンのものの存在感が問われていたのである。

そのような中、イギリスでは1994年から温泉保養地バックストンで国際ギルバート&サリヴァン祭が毎年夏に3週間にわたって開催されるようになる。サヴォイ・オペラの代表作である『ミカド』（1885年）の作成過程を描いた『あべこべ (*Topsy-Turvy*)』が1999年にマイク・リー監督によって製作され、アメリカでも高い評価を得た。また、ギルバート&サリヴァン・アーカイヴ (<http://math.boisestate.edu/gas/>) を見れば、サヴォイ・オペラ同好会がアメリカで急増していることが分かる。2010年以降はペンシルヴァニア州ゲティスバーグでも国際ギルバート&サリヴァン祭が開催されることになった。イギリス人だけでなく、アングロ・サクソンとしてのアイデンティティを保持しようと願うアメリカ白人にとってもサヴォイ・オペラは文字通り「文化的遺産」なのであろう。本書の出版もアングロ・サクソニズム確認の風潮に乗っているのではないかと評者が感じる所以である。